

授 業 概 要

科目名 人間の尊厳と自立		授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 砂井一哉 （特別養護老人ホーム及びデイサービスセンターにおいて施設長（園長）及びセンター長として勤務）
授業回数 15回	時間数（単位数） 30時間（2単位）	配当学年・時期 1学年・前期	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 「<u>人間</u>」の理解を基礎として、人間としての尊厳の保持と自立・自律した生活を支える必要性について理解し、介護場面における倫理的課題について対応できるための基礎となる能力を<u>養う</u>ことを目的・ねらいとする。 [授業全体の内容の概要] - 生活支援の重要な方法として、介護における生活支援技術があるが、その中で人間の尊厳と自立がどのように生かされているかを具体的な生活場面の事例をもとに、高齢者や障害を有する人々の尊厳の保持と自立について基本となる考え方を学ぶ。 - 個人の権利としての人権を理解したうえで、利用者の権利侵害の背景や権利擁護、また利用者の自立のあり方について考え、事例を通じて、介護における尊厳保持と自立支援をみていく。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] - 人々の尊厳と自立について基本的な考え方を理解できる。 - 利用者の権利擁護と介護における自立支援について ICF の考え方をもとに理解できる。			
授業の日程と各階のテーマ・内容・授業方法 コマ数 - オリエンテーション（人間の尊厳とは何か考える） <u>人間を理解すること・自立の意義</u> <u>自立と自律・人間の尊厳と自立</u> - 尊厳と自立をめぐる歴史と仕組み - 人間の尊厳と自立に関する諸規定 - 復習 <u>人間の尊厳・自立と生活</u> <u>介護における権利擁護と人権尊重</u> <u>利用者の権利侵害が起こる状況</u> <u>権利侵害の背景と利用者への権利擁護</u> - 介護における自立支援 - 復習			

- | | |
|----|-------------------------|
| 13 | <u>ICF・自立への意欲と動機づけ</u> |
| 14 | <u>介護における尊厳の保持・自立支援</u> |
| 15 | まとめ |

[単位認定の方法及び基準]

・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・ 考査点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。

・ 平常点(10%)

・ 出席点(15%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。

授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

[使用テキスト・参考文献]

- 1 「最新・介護福祉士養成講座 1 人間の理解」 中央法規出版
- 2 「最新介護福祉士全書 1 人間と社会 人間の理解」 メジカルフレンド社

授 業 概 要

科目名 人間関係とコミュニケーション		授業の種類 講義・演習	授業担当者（実務経験） 橋本 瑞江 （看護業務 10 年）
授業回数 30 回	時間数（単位数） 6 0 時間（4 単 位）	配当学年・時期 1 学年・通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] (1) 対人援助に必要な人間の関係性を理解し、関係形成に必要な<u>コミュニケーションの基礎的な知識</u>を習得する。 (2) 介護の質を高めるために必要な、<u>チームマネジメントの基礎的な知識</u>を理解し、チームで働くための能力を習得する。 [授業の方法および概要] 対人援助に必要な人間関係を理解し、<u>人間関係の形成に必要なコミュニケーションの基礎</u>について習得する。 <u>チームマネジメントの基礎的な知識</u>を理解し、介護の質やチーム力向上のための能力を習得する。 演習をとおして援助者としての<u>基本的態度（傾聴、受容、共感的理解など）を形成するためのコミュニケーション技術やあり方</u>を習得する。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] ① 人間関係を形成するために必要な心理学的支援を踏まえた<u>コミュニケーションの意義や機能</u>を説明できる。 ② 介護実践をマネジメントするために必要な組織の運営管理、人材の育成や活用等の人材管理、それらに必要なリーダーシップ・フォロワーシップ等、チーム運営の基本を説明できる。			

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

人間と人間関係

- 1 人間関係とコミュニケーションを学ぶ前に（オリエンテーション）
- 2 人間らしさのはじまり
- 3 自分と他者の理解
- 4 発達心理学から見た人間関係
- 5 社会心理学から見た人間関係①
- 6 社会心理学から見た人間関係②
- 7 人間関係とストレス

対人関係におけるコミュニケーション

- 8 コミュニケーションの概念
- 9 コミュニケーションの基本構造
- 10 コミュニケーションの手段

対人援助関係とコミュニケーション

- 11 対人援助の基本となる人間関係とコミュニケーション
- 12 対人援助における基本的態度
- 13 援助的人間関係の形成とバイステックの7原則
- 14 演習「コミュニケーション技法を活かす」
- 15 前期期末考査

組織におけるコミュニケーション

- 16 組織の条件とコミュニケーションの特徴
- 17 組織における情報の流れ
- 18 組織において求められるコミュニケーション

介護実践におけるチームマネジメントの意義

- 19 ヒューマンサービスとしての介護サービス
- 20 介護現場で求められるチームマネジメント
- 21 介護実践におけるチームマネジメントの取り組み

ケアを展開するためのチームマネジメント

- 22 ケアを展開するために必要なチームとその取り組み
- 23 チームでケアを展開するためのマネジメント
- 24 チームの力を最大化するためのマネジメント

人材育成・自己研鑽のためのチームマネジメント

- 25 介護福祉職のキャリアと求められる実践力
- 26 介護福祉職としてのキャリアデザイン
- 27 介護福祉職のキャリア支援・開発

組織の目標達成のためのチームマネジメント

- 28 介護サービスを支える組織の構造
- 29 介護サービスを支える組織の機能と役割と管理
- 30 後期期末考査

[単位認定の方法及び基準]

・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考査点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。

・平常点(10%)

確認試験の内容を評価する。

・出席点（15%）

欠席する毎に点数を引いていく。

〔使用テキスト・参考文献〕

新・介護福祉士養成講座 人間の理解 中央法規

授 業 概 要

科目名 社会の理解	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 山田 允宣 （相談業務 7 年）	
授業回数 30 回	時間数（単位数） 60 時間（4 単位）	配当学年・時期 1 学年・通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 人間が生きていくために必要な家族や地域社会とのかかわり、現代のライフスタイルの変化、そこから派生するさまざまな社会問題に対して、介護分野からどのように生活をしていくかを理解する。また、<u>介護実践に必要な知識という観点から、介護保険や障害者自立支援法を中心に、社会保障の制度、施策についての基礎的な知識を養う。その他、利用者の権利擁護の視点、職業倫理観についても養う。</u> [授業全体の内容の概要] 1. <u>個人が自立した生活を営むということを理解するため、個人、家族、近隣、地域社会の単位で人間を捉える視点を養い、人間の生活と社会の関わりや、自助から公助に至る過程について学習する。</u> 2. <u>わが国の社会保障の基本的な考え方、歴史と変遷、しくみについて学習する。</u> 3. <u>介護に関する近年の社会保障制度の大きな変化である介護保険制度と障害者自立支援制度について、介護実践に必要な観点から基礎的な知識を学習する。</u> 4. <u>介護実践に必要とされる観点から、個人情報保護や成年後見制度などの基礎的な知識を学習する。</u> [授業終了時の達成課題（到達目標）] 1. 生活支援や福祉の体系を理解することができる。 2. 社会保障の役割や意義、理念と範囲、社会保障の発展の歴史、制度全体のしくみ 社会保障の発展の歴史、制度の全体のしくみ、現代社会における社会保障の位置づけと今後の課題について理解できる。 3. 介護保険制度の基本的な制度のしくみや運用について理解できる。 4. 障害者の自立支援に向けての基本的な体系を理解できる。 5. 介護実践に関わる諸制度にはどんなものがあるのか習得できる。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. オリエンテーション 2. オリエンテーション② 3. <u>介護保険制度の創設</u> 4. <u>介護保険制度の理念と目的、介護保険制度の動向、しくみ</u> 5. <u>介護認定の流れ</u> 6. 確認テスト 7. <u>サービス内容（居宅）</u> 8. <u>サービス内容（居宅）</u> 9. 確認テスト 10. <u>サービス内容（地域密着）サービス内容（施設）</u> 11. <u>介護保険制度の動向と改正ポイント、</u>			

地域支援事業・介護保険制度における組織、団体の役割 12. 確認テスト 13. <u>障害者自立支援制度ができるまで</u> 14. <u>実践問題</u> 15. <u>中間試験</u> 16. <u>障害者総合支援法・障害福祉サービス利用の流れ</u> 17. <u>自立支援給付のサービス内容・地域生活支援事業</u> 18. 確認テスト 19. <u>家族・地域・社会構造とライフスタイルの変化・生活と福祉</u> 20. <u>社会保障制度、社会保障制度のしくみ</u> 21. 医療保険制度、年金保険 22. 確認テスト 23. 社会扶助・生活保護 24. <u>高齢者に関する関連諸施策・障害者に関する関連諸施策</u> <u>児童に関する関連諸施策</u> 25. <u>個人情報保護法・苦情解決制度</u> 26. <u>成年後見制度、高齢者虐待防止法、障害者虐待防止法</u> 27. 確認試験 28. 実践問題① 29. 実践問題② 30. 期末考査
[単位認定の方法及び基準] ・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 ・考査点 75% 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。 ・平常点 10% 確認試験の内容を評価する ・出席点 15%
[使用テキスト・参考文献] 「受験ワークブック 2022 上」 中央法規出版

授 業 概 要

科目名 生活文化論		授業の種類 講義	授業担当者 上村 幸子 (看護師 13 年・看護教員 25 年)	
授業回数 30回	時間数 (単位数) 60時間 (2単位)	配当学年・時期 1 学年・前期	必修・選択 選択科目	
[授業の目的・ねらい] 様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら共生する社会への理解や、国際的な視野を養う学習である。 新潟県で介護を必要とする人が使用する方言や、高齢者の価値観を理解するために日本文化を学ぶ。また、介護福祉士の学習の基礎となる用語や日常的な日本語会話を学ぶ。そして、学生自身が自分の環境を清潔に保持する体験から、キレイ好きと言われる日本の高齢者の気持ちに共感できることを目的とする。				
[授業全体の内容の概要] 自らスマホを活用して調べ、他の学生の発表を聞きながら広く日本の文化を学習する。日本人の価値観・生活を理解することで、高齢者の気持ちを共感できるようにする。また、介護福祉士の学習の基礎となる用語や会話の一助となるような日本語の学習もする。				
[授業終了時の達成課題 (到達目標)] 1 日本の高齢者の生活や価値観を理解することにより、共感的態度を表現する。 2 介護現場で頻出する用語を理解し日本語で日常的な会話をする。 3 介護者を目指す学生として自身の健康を促進する生活環境を保持する。				
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 [授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1 日本の文化：衣；十二単・着物・下駄・扇子・風呂敷 2 日本の文化：食；おせち料理・刺身・寿司・蕎麦・天ぷら 3 日本の文化：住；障子・畳・襖・床の間・縁側・枯山水 4 日本の文化：生活；お地蔵さん・吉日・七福神・迷信・わびさび 5 日本の文化：遊び；かるた・花札・百人一首・けん玉・折り紙 6 日本の文化：芸能；歌舞伎・能・宝塚歌劇団 7 日本の文化：方言；新潟の方言・関西弁・標準語 8 日本の文化：近年の歴史 9 日本の文化：外国人から見た日本人 10 介護福祉士に必要な日本語（1）：身体の名称 11 介護福祉士に必要な日本語（2）：味の表現 12 介護福祉士に必要な日本語（3）：気持ちの表現 13 介護福祉士に必要な日本語（4）：家族の呼び名 他 14 介護福祉士に必要な日本語（5）：施設内の名称 15 介護福祉士に必要な日本語（6）：ベッド周りの名称 16 介護福祉士に必要な日本語（7）：食事に関する言葉				

- | | |
|----|-----------------------------|
| 17 | 介護福祉士に必要な日本語（8）：清潔に関する言葉 |
| 18 | 介護福祉士に必要な日本語（9）：排泄に関する言葉 |
| 19 | 介護福祉士に必要な日本語（10）：日常的な専門用語 |
| 20 | 介護福祉士に必要な日本語（11）：体調を表す言葉 |
| 21 | 介護福祉士に必要な日本語（12）：薬や治療に関する言葉 |
| 22 | 介護福祉士に必要な日本語（13）：言葉かけ |
| 23 | 介護福祉士に必要な日本語（14）：言葉かけ |
| 24 | 健康に必要な環境（1）：一斉講義 |
| 25 | 健康に必要な環境（2）：演習 |
| 26 | 健康に必要な環境（3）：演習 |
| 27 | 健康に必要な環境（4）：演習 |
| 28 | 健康に必要な環境（5）：演習 |
| 29 | 期末試験対策 |
| 30 | 期末試験 |

〔単位認定の方法及び基準〕

・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考查点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考查を実施する。

・平常点(25%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

〔使用テキスト〕

なし

〔参考文献〕

- 1) アークアカデミー編著、外国人介護士のための声かけとコミュニケーションの日本語、2019、三修社
- 2) 宮崎里司監修、外国人介護職への日本語教育法、2017、日経メディカル開発
- 3) 公益社団法人日本介護福祉士会、介護の日本語、2017
- 4) 一般社団法人 国際交流&日本語支援Y編著、外国人のための会話で学ぼう！介護の日本語、2017 中央法規
- 5) 甘利庸子・高橋絵美編著、外国人のためのやさしく学べる介護のことば、2017、中央法規
- 6) Word & Excel 2013 実教出版
- 7) シェドーイングで学ぶ 介護の日 本語 場面別 声かけ表現集

授 業 概 要

科目名 介護の基本 I	授業の種類 講義	授業担当者(実務経験) 樋口美和子(介護職、センター長 15 年) 郷原 淳子(介護兼相談業務 10 年・ 介護支援専門員 6 年)	
授業回数 30 回	時間数(単位数) 60 時間(4 単位)	配当学年・時期 1 学年・後期	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 「介護の基本 I」では、介護の実践は介護を必要とする人を「生活する人」として受け止め、1 人 1 人の利用者の意向や生き方、生活習慣など「その人らしさ(個性)」を大切にする視点の理解と、<u>自立に向けた介護の理解の重要性を学ぶことをねらいとする。</u> [授業全体の内容の概要] - 生活そのものの理解と生活は 1 人 1 人違うということを理解し、そこから介護を必要とする人がどういう人でどういった生活をしているのかを考える視点について、具体的な事例を用いて展開し理解を深める。 - 考える視点を持つことが、その人らしさの理解につながり、その人らしさがいかに大切であるのかを視聴覚教材などを用いて学ぶ。 - 介護とは何かを教科書から学び、自立に向けた介護とは何かを演習を通じて学びを深める。そこから介護福祉士の基本視点について実際の介護場面から理解する。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] - 介護の意義と役割について理解する。 <u>介護を必要とする人のくらしとその人らしさとは何か理解し、利用者のみならず、家族等に対する精神的支援や援助のために、実践的なコミュニケーション能力を養う。</u> - 介護実践の基本的姿勢と視点を身につけ、<u>介護サービスを提供する対象、場によらず、あらゆる介護場面に汎用できる基本的な介護の知識・技術を養う。</u> <u>自立に向けた介護の必要性について理解し、介護福祉士としての多様な介護現場で利用者の生活でリスクマネジメント等、安全に配慮した介護を実践する能力を養う。</u>			
授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 - オリエンテーション・介護の成り立ち - 専門職による「介護」が誕生した社会的な背景 - 介護の概念の変遷 - 介護保険法成立から今日の社会の問題 - 確認試験 - 介護福祉の基本理念・尊厳とは何か - 介護福祉の基本理念・自立を支える介護 - 地域包括ケアシステムと介護予防、介護福祉士の役割とは - 介護福祉士に医療的ケアが求められる背景、最期を迎える人のケア - 災害時の支援・支援方法と介護福祉士の役割 - 確認試験			

- 12 社会福祉士及び介護福祉士法
- 13 介護教育のカリキュラムの変遷
- 14 介護福祉士を支える団体
- 15 確認試験
- 16 介護の職業倫理
- 17 尊厳ある介護実践
- 18 高齢者虐待と生命倫理
- 19 日本介護福祉士会の倫理要綱
- 20 確認試験
- 21 利用者の尊厳を保持した倫理的介護実践
- 22 自立支援とエンパワメントの考え方
- 23 利用者の意思決定の支援方法
- 24 介護における ICF
- 25 確認試験
- 26 リハビリテーション・障害の理解
- 27 介護予防の概要
- 28 介護予防の種類と特徴
- 29 自立支援と介護予防
- 30 介護予防における介護福祉士の役割

[単位認定の方法及び基準]

・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考查点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考查を実施する。

・出欠点(15%)

欠席する毎に点数を引いていく。

・平常点(10%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

[使用テキスト・参考文献]

「受験ワークブック 2022 上」 中央法規出版

授 業 概 要

科目名 コミュニケーション技術	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 早川 武志（介護職員、生活相談員等 21 年） 内山 清恵（介護業務 15 年）	
授業回数 30 回	時間数（単位数） 60 時間（4 単位）	配当学年・時期 1 学年 通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 介護を必要とする者の理解や援助的関係、援助コミュニケーションについて理解するとともに、利用者やその家族、あるいは多職種協働におけるコミュニケーション能力を身につける。 [授業全体の内容の概要] 1 <u>介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割の基本を学ぶ。</u> 2 <u>介護場面における利用者・家族とのコミュニケーションの実際を学ぶ。</u> 3 <u>介護におけるチームのコミュニケーションの技法の実際を学ぶ。</u> [授業終了時の達成課題（到達目標）] <u>介護を必要とする者の理解や援助的関係、援助的コミュニケーションについて理解するとともに、利用者や利用者家族、あるいは多職種協働におけるコミュニケーション能力を身に付ける。</u> ①介護におけるコミュニケーションの意義・目的・役割について理解し、自分の言葉で説明できる ②利用者様・家族との関係作りについて理解する ③さまざまなコミュニケーション技術について理解し、実際に体験することでそれらを習得する ④感覚機能、運動機能、認知・知覚機能が低下している利用者様の状態について理解し、それに応じたコミュニケーション技法について学び、習得する ⑤介護におけるチームのコミュニケーションに必要な記録や報告等について学び、その技術を習得する			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. オリエンテーション 日本語に親しみをもつ 2. 言葉の意味 3. 言葉の使い方 4. 意味機能別の文法形式を学ぶ 5. 確認テスト① 正しい文になるよう、正しい言葉を選択する 6. 文の文法 7. 文章の文法 8. 日本語での会話 9. 敬語 10. 確認テスト② 敬語の違い、使い方の理解 11. 敬語を用いての日常生活会話 12. 漢字に親しみをもつ 13. 漢字を学ぶ			

14. 漢字の使い方 15. 前期期末考査 16. <u>介護におけるコミュニケーションの意義、目的、役割の基本を学ぶ態度に関する基本技術</u> 17. 言語・非言語的コミュニケーション技術 18. 質問の種類・コミュニケーション障害への対応 19. 視覚障害、聴覚障害のある方への支援方法 20. 構音障害、失語症のある方への支援 21. 確認テスト③ <u>介護におけるコミュニケーションの基本</u> 22. 記録の技術・記録練習 23. 認知症の方とのコミュニケーション方法 24. 障害のある方への支援 25. <u>介護場面における家族とのコミュニケーション</u> 26. <u>介護におけるチームコミュニケーション</u> 27. カンファレンス・情報活用 28. 確認テスト④ 29. 事例検討 30. まとめ
[単位認定の方法及び基準] ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 ・考査点(75%) 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。 ・平常点(25%) 事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。 授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。
[使用テキスト・参考文献] 1) コミュニケーション技術 中央法規 2) はじめての点字 全国視覚障害者情報提供施設協会 3) 手話技能検定 公式テキスト 3・4級 日本能率協会協会マネジメントセンター 4) 外国人のためのやさしく学べる介護のことば 中央法規出版 5) 介護福祉士国家試験 模擬問題集 中央法規出版 6) 介護福祉士国家試験 過去問 中央法規出版 7) 介護福祉士国家試験 合格テキスト 中央法規出版

授 業 概 要

科目名 生活支援技術 I	授業の種類 演習	授業担当者（実務経験） 油科かすみ（介護業務 5 年） 須田 恵子（看護業務 20 年） 郷原 淳子（介護兼相談業務 10 年・ 介護支援専門員 6 年）	
授業回数 90 回	時間数（単位数） 180 時間（6 単 位）	配当学年・時期 1 学年・通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 尊厳の保持の観点から、<u>どのような状態であっても、その人の自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出し、見守ることも含めた自立支援と、1 人 1 人合わせた個別ケアを意識した適切な介護技術を用いて、安全に援助できる技術や知識について習得する。</u>			
[授業全体の内容の概要] 技術演習を中心にし、適宜実技試験を実施しながら技術の効果的な定着を図る。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 介護福祉士として実務につくための基本的な介護技術・態度の達成を目標とする。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 介護技術を学ぶにあたって、この授業で学ぶこと 1 生活支援とは何か 1 生活支援についての理解①(生活支援における介護福祉士の役割) 2 居住環境の整備 2 <u>自立に向けた居住環境の整備の意義と目的</u>、生活空間と介護と居住環境のアセスメント 3 ビデオ、実技演習：ベッドメイキング 3 身支度の介護 4 <u>自立に向けた身じたくの意義と目的</u>（生活習慣と行動と装いの楽しみ、利用者の状態・状況に応じた身じたく） 5 ビデオ、実技演習：着脱の介護のポイント 6 着脱の介護の実際、衣服の清潔 7～9 着脱介助(グループ演習) 4 自立に向けた移動の介護 10 <u>自立に向けた移動の意義と目的</u> 11 運動・移動の 5 原則、ボディメカニクス、体位変換 12 歩行介助、二人での移動介助の方法（施設での介護技術） 13 車椅子の構造と介助方法、ストレッチャーの構造と介助方法 14 ベッド上の座位、端座位から立位への介助、椅子からの立ち上がり介助 15 機能維持の運動と訓練学習への援助、つどい、外出、遠出の意義 16～18 移動の介助(グループ演習) 5 自立に向けた入浴・清拭保持の介護 19 自立に向けた入浴の意義と目的 20 身体の清拭法・身体細部の清潔保持（眼、耳、鼻、爪等） 21 入浴の介護 特浴・家庭浴の入浴の介助			

6 家庭生活に関わる基本知識と家事の介護

2 2 家庭生活の理解

2 3 家庭生活の営み

2 4 家事の支援の意義と目的

2 5～2 6 家事支援における介護技術

7 体位交換の介護

2 7 体位交換の意義と目的、褥瘡の予防と対処

2 8～3 0 体位交換の介助(グループ演習)

8 自立に向けた排泄の介護

3 1 排泄の意義と目的

3 2 トイレでの排泄介助(トイレ誘導、排泄前後の介助)

3 3 ポータブルトイレ等用具を使用した排泄介助とプライバシー保護

3 4 排泄のしくみと機能を生かす介護(排泄の自立度に応じた介護と衣類等用具)

3 5 排泄の障害と介護(失禁や便秘への対応、排泄自立への配慮と介助)

3 6 おむつ交換の方法(布おむつ・紙おむつ)

3 7 おむつ体験と体験発表会

3 8～4 0 排泄の介護応用編1 グループワークによる介護技術研究

9 自立に向けた食事の介護

4 1 食事の意義と目的

4 2 生活のなかでの食事とは(楽しく食事できる環境と食器用具類の整え)

4 3 食事の介護技術のポイント(姿勢や口腔の状態に適した介助)

4 4 食事介助の実践演習(好みへの配慮、食事量の観察、適したスピード)

4 5 誤嚥防止、脱水防止ケア(誤嚥時の緊急ケア概要、脱水の症状の理解誤嚥を防ぐ介護技術(嚥下の状態や姿勢や動作能力と変化))

4 6～5 0 食事の介護応用編 グループワークによる介護技術研究

1 0 口腔ケアの介助

5 1 口腔ケアの意義と目的

5 2 口腔ケアの実践演習

1 1 終末期の介護

5 3 終末期の介護の理解

5 4 終末期のケア①(エンゼルケアなど)

5 5 終末期のケア②(ジョクソウ、体位の工夫)

1 2 緊急時の対応と他職種連携

5 6 バイタルサインについて

5 7 心肺蘇生法と急変時の対応(講義)

5 8 心肺蘇生法と急変時の対応(講義)

5 9 急変時の対応(知識)

6 0 他職種の連携

1 3 睡眠の介護

6 1 睡眠の意義と目的

1 4 福祉用具の概要と活用

6 2 福祉用具の意義と概要

6 3 福祉用具の選択、活用及び管理に関する援助

6 4～7 0 福祉用具を使った実践演習

1 5 生活支援技術の活用

7 1～9 0 生活支援技術の活用(生活支援技術の活用方法のグループワーク演習)

[単位認定の方法及び基準]

・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考查点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考查を実施する。

・平常点(10%)

・出欠点(15%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。

授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

[使用テキスト・参考文献]

目で見てわかる最新介護術 / 成美堂出版

授 業 概 要

科目名 介護過程 I	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 内山清恵（介護業務 15 年） 郷原淳子 （介護兼相談員業務 10 年） （介護兼介護支援専門員 6 年）	
授業回数 4 5 回	時間数（単位数） 9 0 時間（6 単 位）	配当学年・時期 1 学年 通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 他の科目で学習した知識や技術を総合して、介護過程を展開し、介護計画を立案し、適切な介護サービスの提供ができる能力を養う。 [授業全体の内容の概要] ①他の科目で学習した専門的知識・技術を統合できるよう学ぶ。 ②<u>介護過程の意義</u>、目的、内容の理解ができるよう、介護の実践活動がどのような過程を経て行われるのか、その過程の考え方や構成要素について、身近な事例から理解ができるよう行う。 ③I C F 概念等を取り入れながら、様々な角度から介護過程の実際を学べるよう行う。さらに、実習との関連を考慮し実践例に基づいた<u>介護過程が展開</u>できる思考過程を養う。 1 介護過程演習事例では、利用者を総合的視点で捉えられるよう様々な事例を例示し、<u>介護過程の実践的展開</u>し、利用者を取り巻く社会的環境の変化に対応できる援助について学ぶ。 2 <u>介護過程とチームアプローチについて実践的展開ができる援助を学ぶ。</u> [授業終了時の達成課題（到達目標）] ①介護過程とは、個々のニーズを的確に把握することで、介護を計画的に実践・評価をすることの連続であるということを理解する。 ②把握すべき事実の内容を理解し、達成すべき課題に向けて必要な介護実践の内容を計画できるようになる。 ③介護サービス利用者が生活する環境を考慮し、その時その場で最善の支援ができるよう、既存のサービス、社会資源を活用した介護過程を展開できるようになる。 ④専門職の一員として他職種との連携を行うことの必要性が理解できるようになる。 ⑤介護過程の展開における評価の重要性を理解し、その評価が妥当なものであるかどうかの判断、また他者の計画の正当な評価ができるようになる。			

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

介護過程の展開

- 1 「介護過程」の展開を学ぶ前に（オリエンテーション）
- 2 「介護過程」の意義①（目的）
- 3 「介護過程」の意義②（目標）
- 4 演習「旅行計画の立案」
- 5 介護過程の展開：アセスメント
- 6 アセスメントに必要な「事実」の捉え方
- 7 アセスメントに必要な「事実」の捉え方
- 8 アセスメントに必要な「事実」の捉え方
- 9 アセスメントに必要な「事実」の捉え方ー I C F の視点
- 10 アセスメントに必要な「事実」の捉え方ー I C F の視点

介護過程の実践的展開

- 11 情報の整理
- 12 情報の整理と分析（サークルチャート）
- 13 介護過程の中の「事実」の捉え方
- 14 介護過程の中の「事実」の捉え方
- 15 介護過程の中の「事実」の捉え方
- 16 介護過程の中の「事実」の捉え方
- 17 演習 事例から「事実」を整理し情報を整理する①
- 18 演習 事例から「事実」を整理し情報を整理する②
- 19 捉えた「事実」を解釈するためにーコミュニケーション
- 20 捉えた「事実」を解釈するためにーコミュニケーション
- 21 捉えた「事実」を解釈するためにー生活背景の理解
- 22 捉えた「事実」を解釈するためにー生活背景の理解
- 23 捉えた「事実」を解釈するためにー生活背景の理解
- 24 捉えた「事実」を解釈するためにー現状の高齢者生活の理解ー
- 25 演習 「情報の整理をする」
- 26 演習 アセスメント方式の記入方法
- 27 演習 アセスメント方式の記入方法（アセスメント方法）
- 28 演習 アセスメント方式の記入方法（アセスメント方法）
- 29 演習 アセスメント方式 の記入方法（課題の分析）
- 30 演習 アセスメント方式の記入方法（課題の分析）
- 31 演習 アセスメント方式の記入方法（計画の立案方法）
- 32 演習の記入方法（計画の立案方法）
- 33 アセスメント結果による「計画の立案」方法～事例から学ぶ～
- 34 アセスメント結果による「計画の立案」方法～事例から学ぶ～
- 35 アセスメント結果による「計画の立案」方法～事例から学ぶ～
- 36 アセスメント結果による「計画の立案」方法～事例から学ぶ～
- 37 利用者中心の生活継続とは
～以降随時、事例から実際の個別支援計画を立案する～
- 38 利用者中心の生活継続とは
- 39 利用者中心の生活継続ー介護過程の展開（生活環境の変化）
- 40 利用者中心の生活継続ー介護過程の展開（生活環境の変化）
- 41 利用者中心の生活継続ー介護過程の展開（生活環境の変化）
- 42 利用者中心の生活継続ー介護過程の展開（生活環境の変化）

- | | |
|-----|---------------------------------|
| 4 3 | 利用者中心の生活継続－介護過程の展開（サービス提供計画の理解） |
| 4 4 | 利用者中心の生活継続－介護過程の展開（サービス提供計画の理解） |
| 4 5 | 利用者中心の生活継続－介護過程の展開（サービス提供計画の理解） |

〔単位認定の方法及び基準〕

・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・ 考査点 (75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。

・ 平常点 (25%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。

授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

〔使用テキスト・参考文献〕

「受験ワークブック 2022 上」 中央法規出版

アクティブラーニングで学ぶ 介護過程ワークブック（みらい）

授 業 概 要

科目名 介護総合演習Ⅰ	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 郷原 淳子（介護兼生活相談員 10 年・ 介護支援専門員 6 年）	
授業回数 30 回	時間数（単位数） 60 時間（4 単 位）	配当学年・時期 1 学年 前期・後期	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] ①介護実習に必要な基本的な知識・技術を、実践するための具体的方法を学ぶ。 ②介護実習での学びをより深められるよう、<u>利用者理解（自立支援）、介護施設や事業所、チームケア（他職種協働）に関する知識を得るとともに、介護福祉士に必要な基礎能力を養う。</u> ③学生が持つ関心対象や疑問・不安等に焦点をあて、自信を持って実習に臨むようになる。 ④実習での自己の実践内容を分析・考察し、自己覚知へとつなげ、<u>高い専門性と倫理を養う。</u> ⑤実践内容を、さまざまな生活ニーズを持った利用者に対し、多様なサービス提供の場で実践できる応用力を養う。 [授業全体の内容の概要] ①講義で学んだこと、生活支援技術等の演習で学んだことが、実習先や将来介護福祉士として現場に出たときに役立てられるようにする。 ②介護現場では、どのように一人ひとりの利用者の生活支援に役立てているのかということ、学内の学びとリンクできるように進める。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] ①通所・入所・居宅等の介護施設の概要と利用者の生活像を整理・理解でき、介護福祉士としての役割を明確化できる。 ②利用者理解に必要な基本的コミュニケーション方法や介護福祉士としてのマナーを習得する。 ③実習のイメージ作りを膨らませ、自身の目標・課題を明確化することができる。 [授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1. オリエンテーション 2. どのような介護士になりたいか 3. <u>実習の目的・到達目標</u> 4. <u>実習の種類と概要</u> 5. 個人票の作成 6. 実習Ⅰ－1・2の施設概要 7. 実習Ⅰ－1・2の課題について 8. 実習Ⅰ－1・2の目標について 9. 実習まとめの書き方 10. 実習日誌の書き方① 11. 実習日誌の書き方② 12. 実習日誌の書き方③ 13. 実習日誌の書き方④ 14. 実習評価表の書き方			

15. まとめ（前期期末考査） 16. 実習Ⅰ－3施設概要 17. 実習Ⅰ－3課題について 18. 実習Ⅰ－3目標について 19. 実習Ⅰ－1，2振り返り 20. 実習Ⅰ－3施設概要 21. 実習Ⅰ－3課題について 22. 実習Ⅰ－3目標について 23. 実習Ⅰ－3評価表について 24. 実習に向けて 25. 実習の振り返り 26. レポート作成 27. レポート作成 28. <u>介護実践の科学的探究</u> （学科内報告会） 29. <u>介護実践の科学的探究</u> （学科内報告会） 30. まとめ
〔単位認定の方法及び基準〕 ・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 ・考査点(75%) 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。 ・出欠点（15%） 欠席する毎に点数を引いていく。 ・平常点(10%) 事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。
〔使用テキスト・参考文献〕 ・介護実習で困らないための Q&A （中央法規出版）

授 業 概 要

科目名 介護実習 I	授業の種類 実習	授業担当者(実務経験) 山田允宣(相談員業務 7 年) 板垣大介(介護業務 8 年) 須田恵子(看護業務 20 年) 上村幸子(看護業務・教員 38 年) 大塚麻琴(看護業務 18 年) 郷原淳子(介護兼相談員業務 10 年、 介護兼介護支援専門員 6 年) 油科かすみ(介護業務 5 年) 内山清恵(介護業務 15 年)	
授業回数 8 時間×26 日	時間数(単位数) 64 時間(4.2 単位) 144 時間(9.6 単位)	配当学年・時期 1 学年 後期 2 学年 前期	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] ①利用者の居室整備や身体的介護または、授業で学んだことの「統合」と「応用」の力をつけ、介護福祉に関する理解、再確認し、実践する基礎能力を習得する。 ②介護実習では、人間関係を形成しながら慣れ親しんだ地域社会で暮らす高齢者や障害者のある利用者に対して、施設利用等に際しても、その人らしさを維持しながら生活する状況について理解する。 ③日常生活を送る上で、継続ができるよう個別ケアの実践の重要性を理解する。 ④実習施設、事業等の体験を通し施設機能、基本的ケアを学ぶ。 ⑤基本的な生活支援技術を実践し、利用者の状況に応じた介護技術を適切に行えるよう実習を行う。 ⑥実習施設・居宅サービス事業所等のカンファレンスに参加し、介護をする上で必要な他の職種役割について学び、生活支援の一員としての介護福祉士の役割について学ぶ [授業全体の内容の概要] 個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、他職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する学習とする。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] ①介護実習における体験の意味づけが理解でき、利用者の日々の状況に応じた、適切な介護とは何かを学ぶとともに、介護理念・倫理について理解をし、マナー、職務規程を守ることができる。 ②利用者の日常生活や生活環境、疾病・障害等を理解することで、多様な施設、事業所の役割、他職種の役割、介護職の業務の流れを理解できる。 ③利用者の様々な暮らし方、住まいなどの日常生活があることについて理解し、生活の場において、その利用者とのコミュニケーションを通して人間関係の形成を行い、状況に応じた適切な生活支援技術とは何かについての判断力を養う。 ④基本的な介護技術を確認し身につけることで、障害特性や利用者のニーズに応じた介護方法を習得する。また、提供される介護内容の必要性を理解できる。 ⑤障害形態別に応じた、個別ケアの実施を行うための必要介護方法が理解でき、他職種協働や関係機関との連携、専門職としての視点等について、カンファレンスや事例検討に参加することで理解できる。			

⑥住み慣れた地域で生活を継続するための、利用者の主体的な介護サービスの選択の援助方法が理解できる。

⑦利用者の個別性を尊重した自立支援を展開するための、居住環境における支援体制のあり方、福祉用具福祉機器の知識や活用能力を理解することができる。

〔授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法〕

介護実習Ⅰ－１（地域密着型実習）（３２時間）

１ 小規模多機能型居宅介護または認知症対応型共同生活介護施設での日常生活の理解することで、一人ひとりのライフスタイルの多様性を学ぶ。

介護実習Ⅰ－２（居宅：通所介護）（３２時間）

１ 所介護事業所（デイサービス）、通所リハビリテーション事業所（デイケア）、認知症対応型通所介護が行われている事業所において、実習指導者のもと、通所の特性を学び、利用者から親しまれる態度、コミュニケーション方法等を学ぶ。

２ 利用者同士の間関係維持の援助、家族と職員の関係、連絡方法について指導を受ける。

３ 機能訓練やレクリエーション活動の支援、または行事等を企画し実施する。

介護実習Ⅰ－３（入所施設実習）（１４４時間）

利用者の特性、事業所特性・機能を理解する。

①「その人らしさ」が発揮できる日常生活を支援し、継続できるよう個別ケアの重要性を理解する。

② 利用者とのコミュニケーションを通じた人間関係の形成を行い、状況に応じた適切な生活支援技術とは何かについて理解する。

③ 障害レベルに応じて求められる介護方法、それを援助する福祉用具の知識や活用能力を身につけ、習得する。

〔単位認定の方法及び基準〕

・全実習日程の出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考查点(75%)

評価表に基づく実習指導者(課題、実習態度)と担当教員(課題、実習態度)の評価で算出する。

・平常点(25%)

事前課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。

実習に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

〔使用テキスト・参考文献〕

授 業 概 要

科目名 発達と老化の理解	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 上村幸子（看護業務 13 年、 看護教員 25 年、介護教員 2 年）	
授業回数 30 回	時間数（単位数） 60 時間（4 単位）	配当学年・時期 1 学年 通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] <u>発達の観点からの老化を理解し、老化に関する心理や身体機能の変化の特徴に関する基礎的知識を習得する。</u> [授業全体の内容の概要] 人間の成長と発達の過程における、身体的・精神的・社会的変化および老化が生活に及ぼす影響について理解し、ライフサイクルの特徴に応じた生活を支援するために必要な基礎的知識を学習する。「人間の成長と発達の基礎的理解」と「老化に伴うところとからだの変化と生活」に大別される。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 1) 人間の成長と発達の基礎的知識を理解する 2) 老年期の特徴と発達課題を理解する 3) 老化に伴うところとからだの変化および日常生活を理解する 4) 高齢者に多い健康障害と生活上の留意点を理解する			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] ＊数字はコマ数 <u>人間の成長と発達の基礎的知識</u> 1 発達の定義、生涯発達の考え方、成長発達の原則、発達に影響を及ぼす要因 2 発達段階と発達課題（乳児期～成人期） 3 身体的発達 4 心理的発達 5 社会的発達 <u>老年期の特徴と発達課題</u> 6 老年期の定義（WHO、老人福祉法、老人保健法の老人医療制度） 7 老年期の発達課題 8 人格の尊重、老いの価値、喪失体験、セクシュアリティその他 9 演習 <u>老化に伴うところとからだの変化および日常生活</u> 10 加齢による生理機能の低下 11 加齢による身体的機能の低下と生活の変化（1） 12 〃 （2） 13 〃 （3） 14 〃 （4）			

1 5	加齢による心理的機能の低下と生活への影響 (1)
1 6	〃 (2)
1 7	〃 (2)
1 8	加齢による社会的変化と生活への影響 (1)
1 9	〃 (2)
2 0	〃 (3)
<u>高齢者に多い健康障害と生活上の留意点</u>	
2 1	高齢者の症状・疾患の特徴
2 2	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (骨格系・筋系)
2 3	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (脳・神経系)
2 4	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (皮膚・感覚器系)
2 5	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (循環器系)
2 6	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (呼吸器系、消化器系)
2 7	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (腎・泌尿器、内分泌・代謝系)
2 8	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (口腔疾患・ドライマウス)
2 9	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (インフルエンザ・疥癬)
3 0	高齢者に多い疾患と生活上の留意点 (熱中症・脱水・貧血)
[使用テキスト・参考文献] 介護福祉士国家試験 受験 ワークブック上 2022 中央 法規 [単位認定の方法及び基準] 教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による 総 合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 (1) 考查点(75%) ・到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により 期末考查を実施する。 (2) 出欠点(15%) (3) 平常点(10%) ・授業中のノートの提出あるいは授業終了時の確認テス トによって、各回の授業の到達目標の達成度を評価す る。 ・グループ内で自らの学習課題を発表し、メンバーの意 見にも耳を傾け周囲と協調しながら共同学習しているこ とを評価する。	

授 業 概 要

科目名 認知症の理解	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 板垣 大介（介護業務 8 年） 内山 清恵（介護業務 15 年） 油科 かすみ（介護業務 5 年）	
授業回数 30 回	時間数（単位数） 60 時間（4 単位）	配当学年・時期 1 学年 前期・後期	必修・選択 必修科目
〔授業の目的・ねらい〕 認知症に関する基礎知識を習得するとともに、認知症のある人の体験や意志表示が困難な特性を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点を習得する。 〔授業全体の内容の概要〕 認知症のある人が、尊厳を持ち人生を継続していくためには、支援にあたる人たちの認知症の病気や日常生活への影響の理解、それらを緩和するための介護のあり方について学ぶ。 〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕 1. 認知症の原因となる主な疾病を説明できる。 2. 認知症の中核症状と特徴的な行動・心理症状を説明できる。 3. 認知機能の変化が生活に及ぼす影響を理解する事ができる。 4. 認知症介護の視点・ケアの原則について学び、基本姿勢を習得する。 5. 認知症家族・介護者への支援のあり方を習得する。 6. ICF やパーソンセンタードケアの概念を理解し、「その人らしさ」を大切にする介護のありかたを考察することができる。 〔授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法〕 1. オリエンテーション・認知症とは何か 2. <u>医学的な側面からみた認知症の基礎知識Ⅰ（脳のしくみ）</u> 3. <u>認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活</u> 4. 中核症状、生活障害の理解 5. BPSD の理解 6. 確認テスト① 認知症の症状について 7. 認知症の原因疾患と症状（アルツハイマー型認知症と血管性認知症について） 8. 認知症の原因疾患と症状（レビー小体型認知症と前頭側頭型認知症について） 9. その他の病気と症状 10. 若年性認知症とは 11. 若年性認知症の理解を深める 12. 確認テスト② 疾患別特徴について 13. 認知症の診断、治療・予防 14. <u>認知症を取り巻く状況</u> 15. 前期期末考査 16. 認知症の人の思いとコミュニケーション 17. 認知症の人の理解 18. アクティビティ・ケア（レクリエーション・運動・音楽） 19. アクティビティ・ケア（園芸活動・化粧・料理・回想法）			

- 20. 認知症の人を支える地域
- 21. 確認テスト④ 認知症の人との関わり
- 22. 認知症の人へのケア
- 23. 認知症の人へのケア方法（事例検討）
- 24. パーソン・センタード・ケア
- 25. 環境づくりと家族への支援
- 26. 多職種連携と協働
- 27. 確認テスト⑤ 認知症の周りの環境
- 28. 認知症の人のケア（食事・排泄）
- 29. 認知症の人のケア（入浴・睡眠）
- 30. まとめ

[単位認定の方法及び基準]

・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考查点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考查を実施する。

・平常点(25%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

[使用テキスト・参考文献]

- ・受験ワークブック 2022 上 中央法規出版
- ・介護福祉士国家試験 模擬問題集 中央法規出版
- ・介護福祉士国家試験 過去問 中央法規出版

授 業 概 要

科目名 こころとからだのしくみ I		授業の種類 講義		担当 須田 恵子 (看護業務 20 年)	
授業回数 30 回		時間数 (単位数) 60 時間 (4 単位)		配当学年・時期 1 学年 通年	
必修・選択 必修科目					
[授業の目的・ねらい] <u>介護技術の根拠となる人体の構造や機能及び介護サービスの提供における安全への留意点や心理的側面への配慮について理解することを学習する。</u> [授業全体の内容の概要] こころとからだの両面から利用者の状態がどのような要因から引き起こされているか、その根拠となる知識を習得する。 [授業終了時の達成課題 (到達目標)] 人体の構造や機能の基本的な知識を身に付け、こころとからだは相互に影響し合い、意欲や行動などに影響を及ぼすことを理解する。					
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 30 第1章 <u>こころのしくみを理解する</u> 1 序章 健康とは何か 2 第1節 人間の欲求とは 3 第2節 自己実現と尊厳 4 第3節 こころのしくみの基礎 5 確認テスト 第2章 <u>からだのしくみを理解する</u> 第1節 からだのしくみ 6 生命の維持・恒常性のしくみ 7 細胞・遺伝・脳・神経 8 交感神経・副交感神経・内臓の位置 9 確認テスト 10 感覚器 11 呼吸器 12 消化器 13 血液・リンパ・内分泌 14 確認テスト 15 まとめ 16 前期期末考査 17 循環器 18 生殖器 19 泌尿器 20 骨・筋肉・からだの動き 21 確認テスト 第3章 <u>移動に関連したこころとからだのしくみ</u> 22 第1節 移動のしくみ 23 第2節 心身の機能低下が移動に及ぼす影響 24 第3節 変化の気づきと対応 第4章 <u>身じたくに関連したこころとからだのしくみ</u>					

25	第1節	身じたくのしくみ
26	第2節	心身の機能低下が身じたくに及ぼす影響
27	第3節	変化の気づきと対応
28		確認テスト
29		進級試験対策
30		まとめ
		後期期末考査

[単位認定の方法及び基準]

・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考査点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。

・平常点(25%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

・授業態度、試験またはレポートによって総合的に評価する

[使用テキスト・参考文献]

介護福祉士国家試験受験ワークブック 2022 下 中央法規出版

授 業 概 要

科目名 医療的ケア		授業の種類 講義・	授業担当者(実務経験) 大塚麻琴(看護業務18年)	
授業回数 34回	演習回数	授業時間数(単位数) 講義 68時間(4単位)	配当学年・時期 1学年(通年)	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] <u>医療職との連携のもとで医療的ケアを安全・適切に実施できるよう、必要な知識・技術を習得する。</u>医療的ケアの意義を理解し、チーム医療の一員として介護福祉士の役割を理解する。 [授業全体の内容の概要] 喀痰吸引および経管栄養における、解剖生理的な基礎知識から実施の際の留意点や緊急時の対応などの実践的な知識、そして手順・技術の知識を学ぶ [授業終了時の達成課題(到達目標)] ・<u>医療的ケアを安全・適切に実施するために必要な知識・技術を習得する。</u> ・実地研修の導入に向けて基礎研修の知識と技術を習得する。				
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 <u>医療的ケア実施の基礎</u> 1 医療的ケア① 医療的ケアとは 2 医療的ケア② 医行為について 3 清潔保持と感染予防① 感染予防 4 清潔保持と感染予防② 介護福祉職の感染予防 5 清潔保持と感染予防③ 療養環境の清潔、消毒法 6 清潔保持と感染予防④ 感染予防の実際 7 確認テスト① <u>経管栄養(基礎的知識・実施手順)</u> 8 高齢者および障害児・者の経管栄養概論① 消化器系のしくみとはたらき 9 高齢者および障害児・者の経管栄養概論② 消化器症状と経管栄養 10 高齢者および障害児・者の経管栄養概論③ 子どもの経管栄養、トラブル対応 11 確認テスト② 12 高齢者および障害児・者の経管栄養実施手順解説① 使用物品と清潔の保持 13 高齢者および障害児・者の経管栄養実施手順解説② 実施手順と留意点 14 高齢者および障害児・者の経管栄養実施手順解説③ 観察ポイント 15 高齢者および障害児・者の経管栄養実施手順解説④ 演習に向けたまとめ 16 後期期末試験 <u>医療的ケア実施の基礎</u> 17 安全な療養生活① 喀痰吸引や経管栄養の安全な実施 18 安全な療養生活② 救急蘇生 19 健康状態の把握① 身体・精神の健康 20 健康状態の把握② 健康状態を知る項目(バイタルサインなど) 21 健康状態の把握③ 急変状態について 22 確認テスト③ <u>喀痰吸引(基礎的知識・実施手順)</u>				

23 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論① 呼吸のしくみとはたらき 24 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論② 喀痰吸引とは 25 高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論③ 子どもの喀痰吸引、トラブル対応 26 高齢者および障害児・者の喀痰吸引実施手順解説① 使用物品と清潔保持 27 高齢者および障害児・者の喀痰吸引実施手順解説② 実施手順と留意点 28 高齢者および障害児・者の喀痰吸引実施手順解説③ 観察ポイント 29 高齢者および障害児・者の喀痰吸引実施手順解説④ 演習に向けてのまとめ 30 確認テスト④ 31～33 まとめ 34 後期期末試験
[単位認定の方法及び基準] ・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による評価を行う。 ・考査点(75%) 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。 ・平常点(15%) 事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。 ・出欠点(10%) 欠席する毎に点数を引いていく。
[使用テキスト・参考文献] 最新・介護福祉士養成講座 第15巻 中央法規出版 受験ワークブック2022下 中央法規出版

授 業 概 要

科目名 介護の基本 II	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 板垣 大介（介護業務 8 年） 郷原 淳子（介護兼相談業務 10 年・介護支援専門員 6 年） 油科 かすみ（介護業務 5 年）	
授業回数 60 回	時間数（単位数） 120 時間（8 単位）	配当学年・時期 2 学年 通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] ①介護を必要とする利用者を「生活する人」として捉え理解を深め、人間の多様性及び高齢者の暮らしの実際や障害がある人への理解を深め、利用者の生活環境の考え方を学び、生活の観点から知識を深めることを目標とする。 ②<u>多職種協働やケアマネジメントなどの制度のしくみを踏まえ、具体的な事例について介護過程を展開できる能力を養う。</u>そのことから介護サービスの概要と介護サービスの提供の場の特性を理解する。 ③「尊厳の保持」「自立支援」の考えを理解するとともに生活の観点から捉えるための学習を行う。 介護における安全やチームケアについて理解するための学習をする。 [授業全体の内容の概要] ①誰もが人間としての尊厳が守られ、生活者として主体的に生きることを可能にするための人間尊重を基盤とした「介護観」（「人権保障としての介護」）を、授業全体として、「共に学び合う行為」として理解し、育む。 ②介護従事者の安全に関する理念や理論、知識を学び、介護従事者自らの健康、安全が保障できる知識を深め、実践できるよう、介護における安全確保するための知識・技術、事故防止や安全の対策、感染対策、緊急時対応、介護従事者の健康管理等について学ぶ。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] ①介護実践における「主体性の尊重」や「自己決定の尊重」の大切さを基に、「利用者主体」の考え方と介護保険制度における具体的取り組みについて理解できる。 ②介護の基本理念としての「自立支援」の考え方と具体的な展開について、「個別ケア」、「自己決定」、「生活の質」の向上と関連させて理解できる。 ③介護場面における倫理的課題について理解し、尊厳を支えるための専門職としての倫理観をもった行動がとれる。 ④介護を必要とする「利用者の特性」（人間の多様性・複雑性、高齢者・障害者の暮らしの実際、その生活環境）をさまざまな角度から理解し、その家族へのサポート体制の構築ができる。 ⑤介護サービスの特徴、介護実践における連携によるサービス提供、他職種の専門性の理解と実践の現場のイメージが図れる。（介護サービスの概要・提供の場の特性） ⑥安全の概念を予防・自立の点から考察し、安全対策のあり方を理解し説明できる。 ⑦観察力の必要性・重要性、予測力、分析力を高め、個別事例に応じた提案ができるようになる。 ⑧受診援助や緊急時対応、災害時やコミュニティでの役割を認識し、必要な知識・技術を習得する。 ⑨介護従事者の倫理（<u>安全</u>・健康管理を保障するための知識・技術）を活用できる。 [授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1, 2 介護の専門性と倫理 3, 4 日本介護福祉士会倫理綱領 5, 6 身体拘束・虐待防止・個人情報の保護 7, 8 在宅における介護福祉 9, 10 施設における介護福祉			

11, 12	ユニットケアの展開
13, 14	障害者福祉施設における介護福祉
15, 16	介護老人保健施設と介護療養型医療施設
17, 18	<u>多職種連携・地域連携</u>
19, 20	まとめ
21, 22	<u>介護保険制度に基づく介護サービスの概要①</u>
23, 24	<u>介護保険制度に基づく介護サービスの概要②</u>
25, 26	障害者総合福祉法に基づく介護サービス
27, 28	市区町村、当道府県、地域包括支援センター
29, 30	介護における安全の意義
31, 32	介護領域におけるリスクマネジメント
33, 34	事故防止（在宅・施設）
35, 36	感染予防
37, 38	介護従事者の「からだ」の健康管理・介護従事者の「こころ」の健康管理
39, 40	労働安全対策
41, 42	<u>介護福祉に関する諸課題とその検討（事例検討）</u>
43～50	まとめ
50～60	総まとめ
[単位認定の方法及び基準] ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による評価を行う。 ・ 考査点 (75%) 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。 ・ 平常点 (10%) 事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。 授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。 ・ 出欠点 (15%) 欠席する毎に点数を引いていく。	
[使用テキスト・参考文献] 「受験ワークブック 2022 上」中央法規出版	

授 業 概 要

科目名 生活支援技術Ⅱ	授業の種類 講義・演習	授業担当者(実務経験) 上村幸子(看護業務13年・教員25年)	
授業回数 60回	時間数(単位数) 120時間(4単位)	配当学年・時期 2学年前期・後期	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 1 障害に応じた介護技術・知識を学び、専門職として「生活を支える」とは何かを理解させる。 2 自立に向けた居住環境の整備と身じたく、移動、食事、入浴・清潔保持、排泄、家事、睡眠の介護を学ぶ。 3 利用者を尊重した終末期の介護を学ぶ。 4 尊厳の保持の観点から、どのような状態であっても、その人の自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出したり、見守ることも含めた適切な介護技術を用いて、安全に援助できる技術や知識について習得する。 [授業全体の内容の概要] ・技術としての技法だけでなく、障害の特性を理解したうえで状況に合わせた介護を行い、利用者の潜在能力を引き出す支援方法を学ぶ。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] 介護福祉士として実務につくための基本的な介護技術・知識を学び、<u>利用者が尊厳をもって、その人らしく暮らしていくことが出来るように支援するための考え方や技法を習得する。</u>			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 <u>自立に向けた生活支援</u> 1～4 自立に向けた入浴・清拭の介護 5 自立に向けた身じたくの介護 6 自立に向けた食事の介護 7 自立に向けた排泄の介護 8 自立に向けた移動の介護 9 自立に向けた休息・睡眠の介護 10 確認テスト <u>自立に向けた生活支援</u> 11～13 肢体不自由に応じた介護 14 確認テスト 15. 16 視覚障害、聴覚障害、重複障害に応じた介護 17. 18 心臓機能障害、呼吸機能障害に応じた介護 19. 20 腎臓機能障害、膀胱・直腸機能障害、小腸機能障害に応じた介護 21. 22 HIVによる免疫機能障害、肝臓機能障害に応じた介護 23 確認テスト 24. 25 重症心身障害に応じた介護 25. 26 知的障害に応じた介護 27. 28 精神障害に応じた介護			

29	確認テスト
30	まとめ
31	前期期末考査
32. 33	高次脳機能障害に応じた介護
34. 35	発達障害に応じた介護
33. 37	筋萎縮性側索硬化症（ALS）、パーキンソン病に応じた介護
38. 39	悪性関節リウマチ、筋ジストロフィーに応じた介護
40	確認テスト
	<u>自立に向けた身じたくの介護</u>
41	被服生活の基本知識
42	被服の役割と機能
43	被服の素材と洗濯方法
44	衣類、寝具の衛生管理
45. 46	裁縫の実際
47～57	まとめ
58～60	総まとめ
	期末試験
[単位認定の方法及び基準] 教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 ・ 考査点(75%) 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。 ・ 平常点(25%) 事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。 ・ 授業態度、試験またはレポートによって総合的に評価する	
[使用テキスト・参考文献] 1) 介護福祉士国家試験 受験ワークブック下 2022 中央法規	

授 業 概 要

科目名 介護過程Ⅱ	授業の種類 講義	授業担当者(実務経験) 須田 恵子 (看護業務 20 年)	
授業回数 30回	時間数(単位数) 60時間(4単位)	配当学年・時期 2学年 通年	必修・選択 必修科目

[授業の目的・ねらい]

- ① 介護過程が人間の思考過程として、事実を収集し、情報として深め、課題や目標を設定し、それらを支えるための計画・実施・評価の過程を繰り返し辿ることを理解する。
- ② 利用者のみならず家族等についても心身の状態を踏まえつつ、一人ひとりの人生があること、それに向かって個々の人生を利用者と同じように理解し支援を展開するためのコミュニケーション能力の重要性を理解する。
- ③ 介護サービス計画に基づき、専門職がそれぞれの専門性を活かしたアセスメントを経て、利用者の生活のさまざまな側面を支援する計画を立案・実践していることを具体的事例にて理解し、介護サービス計画書と介護福祉士らに任せられた生活の一部分を支える介護計画の関係性を理解し、自らが支援を提供するとともに支援という関わりを通して利用者の人生・生活全体を見渡す視点を持つこと。
- ④ 生活する者にとって安全を確保する重要性、またリスクが生じるとはどのようなことなのかを理解し、安全でよりリスクが少ない状態を目指すためには確かな介護過程が根底となることを理解する。

[授業全体の内容の概要]

- ① 介護過程の展開(サイクル)の理解ができ、アセスメントの重要性が理解でき、そこから把握する日常生活課題(ニーズ)をどのように行うことが改善へと導けるのかという思考過程、視点を養う。
- ② ICF理念の導入にて、介護過程演習事例では、利用者を総合的視点で捉えられるよう様々な事例を例示し、介護過程を展開し、利用者を取り巻く社会的環境の変化に対応でき、介護計画の修正など時間の経過にしたがって変化する利用者の例も取り入れることで、実践力を養う。

[授業終了時の達成課題(到達目標)]

- ① 学習すべき知識・技術は、介護過程の思考として取り込み、利用者の能力に応じて発展、活用するものであると理解する。
- ② 介護方法には、すべてにおいて意味・理由があり、説明能力も求められること理解する。
- ③ マネジメントを行うために必要な知識と技術を身につけ、専門職の一員として他職種との連携を行うことができるようになる。
- ④ 利用者を取り巻く環境を意識し常に社会の動きに関心を持つことの重要性と、その方法を理解できるようになる。
- ⑤ 利用者と家族への説明と同意が、職業倫理に基づいた重要事項であると理解し実行できる。
- ⑥ アセスメントの意義を理解し、なぜその項目が必要なのか説明することができ、アセスメントツールがどのような思考の元に作り上げられてきたのかを理解できる。
- ⑦ 客観的・科学的な整理を元に、ターミナルケアについて考え、その関わりの中で専門職としての感情・態度を整理する必要性を理解できる。

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

コマ数

- 1 介護過程の展開①（評価の必要性）
- 2 介護過程の展開②（評価の方法）
- 3 介護過程の実践的展開①（自立に向けた介護過程展開の実際）
- 4 介護過程の実践的展開②（自立に向けた介護過程展開の実際）
- 5 介護過程の実践的展開③（状況・状態別介護過程展開の実際）
- 6 介護過程の実践的展開④（状況・状態別介護過程展開の実際）
- 7 介護過程の実践的理解－施設①
- 8 介護過程の実践的理解－施設②
- 9 介護過程の実践的理解－在宅①
- 10 介護過程の実践的理解－在宅②
- 11 介護過程とチームアプローチ①ケースカンファレンス
- 12 介護過程とチームアプローチ②ケースカンファレンス
- 13 介護過程とチームアプローチ①サービス担当者会議
- 14 介護過程とチームアプローチ②サービス担当者会議
- 15 チームアプローチの実際①
- 16 チームアプローチの実際②
- 17 介護過程における説明と同意①（各専門職の専門性の理解）
- 18 介護過程における説明と同意②（利用者・家族の視点）
- 19 アセスメントツールの活用①
- 20 アセスメントツールの活用②
- 21 アセスメントツールの活用③
- 22 アセスメントツールの活用④
- 23 アセスメントツールの活用⑤
- 24 アセスメントツールの活用⑥
- 25 演習①（各種会議の進め方）
- 26 演習②（各種会議の進め方）
- 27 演習③（各種会議の進め方）
- 28 演習④（各種会議の進め方）
- 29 演習「専門職としてあるべき姿を考える」①
- 30 演習「専門職としてあるべき姿を考える」②

[単位認定の方法及び基準]

- ・教科出席率が 80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による評価を行う。
- ・考查点(75%)
到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考查を実施する。
- ・平常点(15%)
事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。
授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。
- ・出欠点(10%)
欠席する毎に点数を引いていく。

[使用テキスト・参考文献]

アクティブラーニングで学ぶ 介護過程ワークブック（みらい）

授 業 概 要

科目名 介護総合演習 II	授業の種類 演習	授業担当者(実務経験) 郷原 淳子(介護兼生活相談員 10 年・ 介護支援専門員 6 年)	
授業回数 30 回	時間数(単位数) 60 時間(2 単位)	配当学年・時期 2 学年 通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] ①介護実習施設の役割・機能、施設利用者とその家族の生活ニーズを理解できる。 ②利用者・家族のニーズに対する介護福祉士の役割と、自立支援に向けた他職種協働(チームケア)の意義と役割を理解できる。 ③介護過程等、授業で学んだ知識・技術を実習で展開するための学習課題を明確化できる。 [授業全体の内容の概要] ①介護実習 I において明確化した課題の改善に向け、授業との統合・リンクさせることで、介護福祉士に必要な知識・技術の向上を目指す。 ②多様なニーズを持っている利用者に対する、柔軟な視点を養う。 ③介護実習 I においての事後指導から得た課題を、介護実習 II の事前指導へと導く。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] ①介護実習 I の実習施設の概要と利用者の生活ニーズを整理・理解でき、介護福祉士に求められる倫理性と専門性を明確化できる。 ②介護実習 I の振り返ることで、自己を客観的に振り返り、介護実習 II に向けた課題を明確化できる。 ③介護実習 II に向け、個別ケアや多様なニーズ・サービス形態のあり方を理解できる。 [授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1 介護実習 I-3 実習オリエンテーション 2 介護実習の概要・目的 3 実習課題の確認 4 実習計画の明確化 5 実習計画書の作成 6 記録の方法 7 記録の方法 8 記録の方法 9 記録の方法 10 介護実習 II 実習オリエンテーション 11 介護実習の概要・目的 12 実習 1-3 のまとめ 13 実習 1-3 報告 14～16 期末考査対策 17 期末考査 18 実習 II 課題の確認 19 実習計画書の作成 20～21 実習 II のまとめ			

22 実習Ⅱ報告
23～26 総まとめ（国家試験問題対策）
27～29 期末考査対策
30 期末考査

〔単位認定の方法及び基準〕

・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による評価を行う。

・考査点(75%)

到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考査を実施する。

・平常点(15%)

事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。
授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

・出欠点(10%)

欠席する毎に点数を引いていく。

〔使用テキスト・参考文献〕

実習要綱

授 業 概 要

科目名 介護実習 I	授業の種類 実習	授業担当者(実務経験) 山田允宣(相談員業務 7 年) 板垣大介(介護業務 8 年) 須田恵子(看護業務 20 年) 上村幸子(看護業務・教員 38 年) 大塚麻琴(看護業務 18 年) 郷原淳子(介護兼相談員業務 10 年、 介護兼介護支援専門員 6 年) 油科かすみ(介護業務 5 年) 内山清恵(介護業務 15 年)	
授業回数 8 時間×26 日	時間数(単位数) 64 時間(4.2 単位) 144 時間(9.6 単位)	配当学年・時期 1 学年 後期 2 学年 前期	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] ①利用者の居室整備や身体的介護または、授業で学んだことの「統合」と「応用」の力をつけ、介護福祉に関する理解、再確認し、実践する基礎能力を習得する。 ②介護実習では、人間関係を形成しながら慣れ親しんだ地域社会で暮らす高齢者や障害者のある利用者に対して、施設利用等に際しても、その人らしさを維持しながら生活する状況について理解する。 ③日常生活を送る上で、継続ができるよう個別ケアの実践の重要性を理解する。 ④実習施設、事業等の体験を通し施設機能、基本的ケアを学ぶ。 ⑤基本的な生活支援技術を実践し、利用者の状況に応じた介護技術を適切に行えるよう実習を行う。 ⑥実習施設・居宅サービス事業所等のカンファレンスに参加し、介護をする上で必要な他の職種との役割について学び、生活支援の一員としての介護福祉士の役割について学ぶ [授業全体の内容の概要] 個々の生活リズムや個性を理解するという観点から様々な生活の場において個別ケアを理解し、利用者・家族とのコミュニケーションの実践、介護技術の確認、他職種協働や関係機関との連携を通じてチームの一員としての介護福祉士の役割について理解する学習とする。 [授業終了時の達成課題(到達目標)] ①介護実習における体験の意味づけが理解でき、利用者の日々の状況に応じた、適切な介護とは何かを学ぶとともに、介護理念・倫理について理解をし、マナー、職務規程を守ることができる。 ②利用者の日常生活や生活環境、疾病・障害等を理解することで、多様な施設、事業所の役割、他職種の役割、介護職の業務の流れを理解できる。 ③利用者の様々な暮らし方、住まいなどの日常生活があることについて理解し、生活の場において、その利用者とのコミュニケーションを通して人間関係の形成を行い、状況に応じた適切な生活支援技術とは何かについての判断力を養う。 ④基本的な介護技術を確認し身につけることで、障害特性や利用者のニーズに応じた介護方法を習得する。また、提供される介護内容の必要性を理解できる。 ⑤障害形態別に応じた、個別ケアの実施を行うための必要介護方法が理解でき、他職種協働や関係機関との連携、専門職としての視点等について、カンファレンスや事例検討に参加することで理解できる。			

⑥住み慣れた地域で生活を継続するための、利用者の主体的な介護サービスの選択の援助方法が理解できる。

⑦利用者の個別性を尊重した自立支援を展開するための、居住環境における支援体制のあり方、福祉用具福祉機器の知識や活用能力を理解することができる。

〔授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法〕

介護実習Ⅰ－１（地域密着型実習）（３２時間）

１ 小規模多機能型居宅介護または認知症対応型共同生活介護施設での日常生活の理解することで、一人ひとりのライフスタイルの多様性を学ぶ。

介護実習Ⅰ－２（居宅：通所介護）（３２時間）

１ 所介護事業所（デイサービス）、通所リハビリテーション事業所（デイケア）、認知症対応型通所介護が行われている事業所において、実習指導者のもと、通所の特性を学び、利用者から親しまれる態度、コミュニケーション方法等を学ぶ。

２ 利用者同士の間関係維持の援助、家族と職員の関係、連絡方法について指導を受ける。

３ 機能訓練やレクリエーション活動の支援、または行事等を企画し実施する。

介護実習Ⅰ－３（入所施設実習）（１４４時間）

利用者の特性、事業所特性・機能を理解する。

①「その人らしさ」が発揮できる日常生活を支援し、継続できるよう個別ケアの重要性を理解する。

② 利用者とのコミュニケーションを通じた人間関係の形成を行い、状況に応じた適切な生活支援技術とは何かについて理解する。

③ 障害レベルに応じて求められる介護方法、それを援助する福祉用具の知識や活用能力を身につけ、習得する。

〔単位認定の方法及び基準〕

・全実習日程の出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・考查点(75%)

評価表に基づく実習指導者(課題、実習態度)と担当教員(課題、実習態度)の評価で算出する。

・平常点(25%)

事前課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。

実習に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

〔使用テキスト・参考文献〕

授 業 概 要

科目名 介護実習 II	授業の種類 実習	授業担当者(実務経験) 山田允宣(相談員業務 7 年) 板垣大介(介護業務 8 年) 須田恵子(看護業務 20 年) 上村幸子(看護業務・教員 38 年) 大塚麻琴(看護業務 18 年) 郷原淳子(介護兼相談員業務 10 年、 介護兼介護支援専門員 6 年) 油科かすみ(介護業務 5 年) 内山清恵(介護業務 15 年)	
授業回数 8 時間×3 1 日	時間数(単位数) 248 時間(16.5 単位)	配当学年・時期 2 学年 通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] ①介護実習 I で学んだ基本的な生活支援技術から、「介護過程」で学んだ思考のプロセスを実際の利用者を受け持つことで実践する。 ②個々の利用者の生活背景や生活リズムを理解し、必要な情報を収集し、自立支援の観点から実際の場面での介護過程展開能力が身につける。 ③利用者、実習指導者・介護職員との連携のもと、立案した介護計画の基ついた介護を提供し、自ら行った介護実践の評価、計画の修正ができる実習を行う。 [授業全体の内容の概要] <u>個別ケアを行うために個々の生活リズムや個性が理解できるよう、利用者の課題を明確にするための利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれをふまえた計画の修正といった介護過程を展開し、他科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービスの提供の基本となる実践力を習得する。</u> [授業終了時の達成課題(到達目標)] ①<u>介護計画の作成、実施後の評価や、これをふまえた計画の修正といった一連の介護過程のすべてを継続的に繰り返すことで、</u> ・<u>利用者の生活における課題を明確にするため、必要な情報収集ができる。</u> ・<u>自立支援の観点から、利用者の生活課題を明確にできる。</u> ・<u>日常生活においての課題から、利用者、介護職員と相談しながら介護計画を立案できる。</u> ・<u>介護計画に基づき、適切な介護が実践できる。</u> ・<u>自ら行った介護の評価や計画の修正を行うことができる。</u> ②介護実習を通して、介護という職業の意義深さ、介護従事者としての働く姿勢、職業倫理を身につけ、常に利用者の人権を守り、介護の本質を探究する基本的な姿勢が身につく。 ③実習指導者との連携のもとに、学生が施設等の職員から受けた指導を通して、介護福祉士としての責任を果たす能力や態度を養成する。			

[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法]

介護実習Ⅱ（入所施設実習）

- ①重度障害を有する障害者または老人施設を実習施設として、障害レベルに応じて求められる介護技術の適切な方法を学べるようにする。
- ②実習指導者からの指導及び、より多くのケースカンファレンス時間を準備し、利用者の介護ニーズに対応したレベル向上が達成できるようにする。
- ③巡回指導担当教員との施設巡回指導を中心として、学生自身の経験、体験及び記録類からの再検討を行うことで、学習強化を図れるようにする。
- ④実習期間中に、夜勤介護プログラムの導入を行うことで、利用者の1日の生活状況がどのように営まれているか理解を深める。
- ⑤施設運営プログラムに参加し、サービス全般について理解させると同時に、個別介護過程の展開、記録の方法について学習し、チームの一員として介護を実践できるよう現任準備教育を行う。

[単位認定の方法及び基準]

・全実習日程の出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。

・ 考査点 (75%)

評価表に基づく実習指導者(課題、実習態度)と担当教員(課題、実習態度)の評価で算出する。

・ 平常点 (25%)

事前課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。

実習に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。

[使用テキスト・参考文献]

授 業 概 要

科目名 障害の理解	授業の種類 講義	授業担当者（実務経験） 福田康之（介護業務 15 年）		
授業回数 30 回	時間数（単位数） 60 時間（4 単位）	配当学年・時期 2 学年・通年	必修・選択 必修科目	
[授業の目的・ねらい] 障害のある人の心理や身体機能に関する基礎知識を習得するとともに、障害のある人の体験を理解し、本人のみならず家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点について習得する。				
[授業全体の内容の概要] 1 障害者の思いや生活実態を踏まえながら、障害の概念を学ぶ。（ノーマライゼーション、リハビリテーション、インクルージョン） 2 身体面に障害のある人について、医学的理解、心理的理解、生活の理解、介護上の留意点を学ぶ。 3 精神面に障害のある人、重症心身障害のある人、難病のある人について、医学的理解、心理的理解、生活の理解、介護上の留意点について学ぶ。 4 障害のある人の自己決定、エンパワメント、権利擁護、及び生活ニーズの把握、アセスメント、介護過程について学ぶ。 5 家族の支援とは何かについて事例を踏まえて学ぶ。 6 関連職種とのチームアプローチのあり方、および地域で行政やインフォーマルの協力を得る手法に関して学ぶ。				
[授業終了時の達成課題（到達目標）] 1 「障害」、ノーマライゼーションとはどういうものなのかについて理解できる。 2 視覚、聴覚、言語、重複障害、肢体不自由、内部障害のある人の生活について理解できる。 3 知的、精神、高次脳機能、発達、重症心身障害、難病のある方のある人の生活について理解できる。 4 障害のある人に対する介護の基本的視点について理解できる。 5 家族への支援とは何か理解できる。 6 介護福祉士以外の福祉職種との連携を理解できる。				
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1 障害の基礎的理解①（ICF 国際生活機能分類について学ぶ） 2 障害の基礎的理解②（障害者福祉の基本理念について学ぶ） 3 障害のある人の生活の理解①（視覚障害のある人の生活を学ぶ①） 4 障害のある人の生活の理解②（視覚障害のある人の生活を学ぶ②） 5 障害のある人の生活の理解③（聴覚・言語障害のある人の生活を学ぶ①） 6 障害のある人の生活の理解④（聴覚・言語障害のある人の生活を学ぶ②） 7 障害のある人の生活の理解⑤（重複障害のある人の生活を学ぶ） 8 障害のある人の生活の理解⑥（肢体不自由（運動機能障害）のある人の生活を学ぶ） 9 障害のある人の生活の理解⑦（心臓機能障害のある人の生活を学ぶ）				

1 0	<u>障害のある人の生活の理解⑧</u> (腎機能障害のある人の生活を学ぶ)
1 1	<u>障害のある人の生活の理解⑨</u> (呼吸機能障害のある人の生活を学ぶ)
1 2	<u>障害のある人の生活の理解⑩</u> (膀胱、直腸機能障害のある人の生活を学ぶ)
1 3	<u>障害のある人の生活の理解⑪</u> (免疫機能障害・肝臓機能障害のある人の生活を学ぶ)
1 4	<u>障害のある人の生活の理解⑫</u> (知的障害のある人の生活を学ぶ①)
1 5	<u>障害のある人の生活の理解⑬</u> (知的障害のある人の生活を学ぶ②)
1 6	<u>障害のある人の生活の理解⑭</u> (精神障害のある人の生活を学ぶ①)
1 7	<u>障害のある人の生活の理解⑮</u> (精神障害のある人の生活を学ぶ②)
1 8	<u>障害のある人の生活の理解⑯</u> (高次脳機能障害のある人の生活を学ぶ①)
1 9	<u>障害のある人の生活の理解⑰</u> (高次脳機能障害のある人の生活を学ぶ②)
2 0	<u>障害のある人の生活の理解⑱</u> (発達障害のある人の生活を学ぶ①)
2 1	<u>障害のある人の生活の理解⑲</u> (発達障害のある人の生活を学ぶ②)
2 2	<u>障害のある人の生活の理解⑳</u> (重症心身障害のある人の生活を学ぶ)
2 3	<u>障害のある人の生活の理解㉑</u> (難病のある人の生活を学ぶ)
2 4	<u>障害のある人に対する介護①</u> (障害のある人に対する介護の基本的視点について学ぶ)
2 5	<u>障害のある人に対する介護②</u> (基本的視点に基づいた個別支援について学ぶ)
2 6	<u>障害のある人に対する介護③</u> (社会資源の利用と開発について学ぶ)
2 7	<u>家族への支援①</u> (家族への支援とは何かについて学ぶ)
2 8	<u>家族への支援②</u> (家族の状態の把握と介護負担軽減について学ぶ)
2 9	<u>連携と協働①</u> (チームケア、チームアプローチについて学ぶ)
3 0	<u>連携と協働②</u> (地域におけるサポート体制について学ぶ)
[単位認定の方法及び基準] ・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による評価を行う。 ・考查点(75%) 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考查を実施する。 ・平常点(15%) 事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。 ・出欠点(10%) 欠席する毎に点数を引いていく。	
[使用テキスト・参考文献] 最新・介護福祉士養成講座 第14巻 中央法規出版	

授 業 概 要

科目名 こころとからだのしくみⅡ		授業の種類 講義	授業担当者(実務経験) 大塚麻琴（看護業務 18 年）
授業回数 30回	時間数（単位数） 60時間（4単位）	配当学年・時期 2学年 通年	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 1. <u>介護実践に必要な知識という観点から、からだとこころのしくみについての知識を養う。介護技術の根拠となる人体の構造や機能及び介護サービスの提供における安全への留意点や心理的側面への配慮について理解する。</u> 2. こころとからだの両面を見ていくことにより残存能力、潜在能力を引き出し利用者の尊厳の尊重と自立を援助するための適切な介護方法を導き出す。 [授業全体の内容の概要] こころとからだの両面から利用者の状態がどのような要因から引き起こされているか、その根拠となる知識を習得する。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 人体の構造や機能の基本的な知識を学び、こころとからだは相互に影響し合い、意欲や行動などに影響を及ぼすことを理解する。どのような状態があっても、その人が望む環境の中で「活動」「参加」し続けられるような援助ができるようにする。			
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] コマ数 1 こころとからだのしくみⅠ復習 <u>こころとからだのしくみⅡ</u> <u>人生の最終段階のケアに関連したこころとからだのしくみ</u> 2 人生の最終段階に関する「死」のとりえ方 3 「死」に対するこころの理解 4 終末期から危篤状態、死後のからだの理解 5 終末期における医療職との連携 6 確認テスト <u>休息・睡眠に関連したこころとからだのしくみ</u> 7 休息・睡眠のしくみ 8 心身の機能低下が休息・睡眠に及ぼす影響 9 変化の気づきと対応 10 確認テスト 11 試験対策 12 まとめ 13 前期期末試験 14 国家試験対策 <u>食事に関連したこころとからだのしくみ</u> 15 食事のしくみ 16 心身の機能低下が食事に及ぼす影響 17 変化の気づきと対応 18 確認テスト <u>入浴・清潔保持に関連したこころとからだのしくみ</u> 19 入浴・清潔保持のしくみ			

2 0 心身の機能低下が入浴・清潔保持に及ぼす影響 2 1 変化の気づきと対応 2 2 確認テスト <u>排泄に関連したところとからだのしくみ</u> 2 3 排泄のしくみ 2 4 心身の機能低下が排泄に及ぼす影響 2 5 変化の気づきと対応 2 6 確認テスト 2 7 ところとからだのしくみ総復習 2 8 ところとからだのしくみ総復習 2 9 後期総まとめ 3 0 後期期末試験
[単位認定の方法及び基準] ・教科出席率が80%以上の者に対して、以下の配点による総合点を算出し、学内共通の基準による絶対評価を行う。 ・考查点(75%) 到達目標の修得状況を測るために、筆記試験により期末考查を実施する。 ・平常点(15%) 事前課題、授業内の課題を期限までに提出し、その内容が課題に沿ったものである。授業に積極的に参加し、周囲と協調しながら自らの向上を図っている。 ・出欠点(10%) 欠席する毎に点数を引いていく。
[使用テキスト・参考文献] 最新・介護福祉士養成講座 第11巻 中央法規出版 受験ワークブック 2022下 中央法規出版

授 業 概 要

科目名 医療的ケア演習		授業の種類 演習	授業担当者(実務経験) 上村幸子(看護業務 13 年) 須田恵子(看護業務 20 年) 大塚麻琴(看護業務 18 年)	
授業回数	演習回数 16 回	演習時間数(単位数) 演習 32 時間	配当学年・時期 2 学年 後期	必修・選択 必修科目
[授業の目的・ねらい] 医療職との連携のもとで医療的ケアを安全・適切に実施できるよう、必要な知識・技術を習得する。医療的ケアの意義を理解し、チーム医療の一員として介護福祉士の役割を理解する。 [授業全体の内容の概要] 喀痰吸引および経管栄養における、解剖生理的な基礎知識から実施の際の留意点や緊急時の対応などの実践的な知識、そして手順・技術の知識を学ぶ [授業終了時の達成課題(到達目標)] ・医療的ケアを安全・適切に実施するために必要な知識・技術を習得する。 ・実地研修の導入に向けて基礎研修の知識と技術を習得する。				
[授業の日程と各回のテーマ・内容・授業方法] 演習回数 演習 1～2 経管栄養法 シュミレーターによる実技演習 胃ろうまたは腸ろうによる経管栄養 5 回以上 経鼻経管栄養 5 回以上 3～5 吸引 シュミレーターによる実技演習 口腔内の喀痰吸引 5 回以上 鼻腔内の喀痰吸引 5 回以上 気管カニューレ内部の喀痰吸引 5 回以上 6 救急蘇生法 救命救急に伴う一連の動作を実施、AED 使用方法の演習 1 回以上				
[演習の評価方法及び基準] 経管栄養・喀痰吸引 経管栄養(2 種類)、喀痰吸引(3 種類)それぞれのシュミレーター演習を指定された回数以上を実施した上で、5 回目の指導者評価結果が全ての項目について手順どおりに実施できていると認めた場合に演習修了を認める。 一定基準に満たなかった場合は、補習受講が必要となる。				
[使用テキスト・参考文献] 最新・介護福祉士養成講座 第 15 巻 中央法規出版 受験ワークブック 2022 下 中央法規出版				